

## ヒッタイト研究の新段階

吉 田 和 彦

### I

ドイツのアッシリア学者 Hugo Winckler によって、小アジアの Boğazköy から一万にのぼる大量のヒッタイト楔形文字粘土板が発掘されたのは、1906年のことである。そして、チェコの Bedřich Hrozný によって、その解読の基礎が与えられたのが1917年であるから<sup>1)</sup>、ヒッタイト学はわずか70年足らずの歴史しか持たない学問分野である。しかしながら、その短い研究史にもかかわらず、ヒッタイトの発見、解読が印欧語比較研究に与えた今日までの影響とその貢献は、周知のように、計り知れない。

3000年以上も歴史の忘却のかなたに追いやられていた、このアナトリアの言語が、印欧語族に帰属するという Hrozný の主張は、当時の学界にとって驚きであるばかりでなく、その正当性に猜疑さえ投げかけられた。その理由は、ヒッタイトが発見された地理的位置もさることながら、なによりも、それが当時知られていかなるインド・ヨーロッパ語からも著しく異なっていたからである。語彙においては、*genu-*「膝」のような、他の印欧諸語と対応し（サンスクリット語 *jānu-*、ギリシア語 *γόνυ*、ラテン語 *genu*、ゴート語 *kniu*）<sup>2)</sup>、確実に祖語にまで遡る語もあるが、大抵は語源不詳もしくは非インド・ヨーロッパ系に属する語が多い。文法においても、所謂、*mi*-動詞の語尾、1 sg. *-mi*、2 sg. *-ši*、3 sg. *-zi*、例えば、*ešmi*「私は…である」、*ešši*、*ešzi* (cf. サンスクリット *ásmi*、*ási*、*ásti*、ギリシア語 *εἰμί*、*εἶ*、*ἐστί*、ラテン語 *sum*、*es*、*est*、ゴート語 *im*、*is*、*ist*) や、*kuenzi*「(彼は)打つ」と *kunanzi*「(彼らは)打つ」の間にみられる母音

1) 1915年のドイツオリент学会での発表の二年後に、Hrozný は次の文法書を著した。Die Sprache der Hethiter : Ihr Bau und Ihre Zugehörigkeit zum indogermanischen Sprachstamm, ein Entzifferungsversuch. Leipzig.

2) この語は acrostatic のタイプの母音交替を示す（主格 \**gón-u*、属格 \**gén-u-s*）。

交替 (cf. サンスクリット語, 3 sg. *hánti*: 3 pl. *ghnánti* < 印欧祖語 \**g<sup>w</sup>hén-ti*: \**g<sup>w</sup>hn-ónti*) などに代表されるインド・ヨーロッパ的特徴は否定しようもないが, 直接法と命令法の二つの法しか持たない点<sup>3)</sup>, 未完了 (imperfect), アオリスト, 完了などの範疇がない点, 名詞の性において男性と女性を区別しない点など, 印欧語のなかでは特異である。

ヒッタイトと残りのインド・ヨーロッパ諸語の間のこのような相違を, 最も自然に説明するものとして提唱されたのが, インド・ヒッタイト説 (Indo-Hittite Hypothesis) である。この仮説によると, ヒッタイトは他の諸言語よりも遙か以前に共通祖語より分離し, サンスクリット, ギリシア, ラテンなどの共通の祖先であるインド・ヨーロッパ祖語 (Indo-European) と姉妹語の関係にある。ヒッタイトの分離以前の最も初期の段階をインド・ヒッタイト祖語 (Indo-Hittite) と呼ぶならば, 図1の系統関係が得られる。

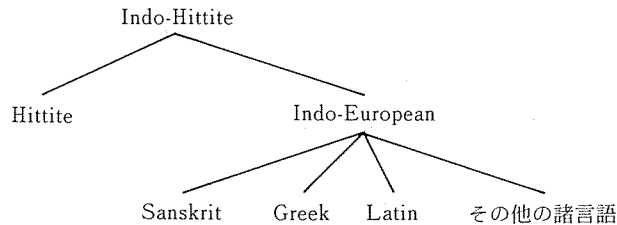


図 1

この考えを最も精力的に発展させたのは, イェール大学の E.H. Sturtevant であるが, 一般には容易に受け入れられなかった<sup>4)</sup>。もしもインド・ヒッタイト説が正しいならば, 他のすべての言語が, ヒッタイトと姉妹関係にあるインド・ヨーロッパ祖語の時期に, 共通に蒙った変化, もしくは他のすべての言語にはみられない, ヒッタイトのみが独自に受けた変化が顕著でなければならない。しかし, 実際にはどうかというと, ヒッタイト

3) 共通基語にはこのほかに接続法 (subjunctive), 希求法 (optative) が再建される。サンスクリットには指令法 (injunctive) が頻繁に用いられるが, それが共通基語に遡るかどうかにについては, 学者の意見はかなり相違がある。

4) インド・ヒッタイト説の詳細については Sturtevant [1942, 1951, 1962] を参照されたい。尚, Sturtevant の大学の後継者である W. Cowgill が, 近年, この仮説の正当性を再び主張したが, [COWGILL 1975, 1979, 1981], その Cowgill も, 博識を惜しまれながら, 1985年6月20日に55才の若さで亡くなった。

トと他のいくつかの言語の間に固有の特徴が数多く存在するのであるから、ヒッタイトはあくまで他の言語と同じレベルにある印欧語のメンバーとして扱えなければならない(図2を参照)。

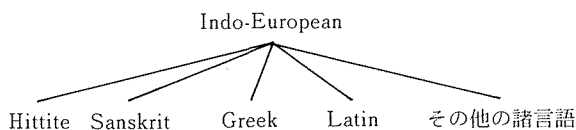


図 2

インド・ヒッタイト説の提唱者達は、ヒッタイトの発見以前に既に再構成されていた印欧祖語とヒッタイトとを直接突き合わせたために、両者間の相違により心を奪われた。そうではなく、Benveniste が述べているように<sup>5)</sup>、祖語は理論的な構築物であり、新しい言語の発見や、ある言語もしくは言語群内部で従来知られていなかった新しい事実の発見によって改変されるものであるから、ヒッタイトが印欧語族に属することが判明した以上、それを有機的な成員として印欧語族に組み込んでいかねばならない。そして、同時にまた、ヒッタイトを考慮に入れることによって、印欧語比較文法において未解決であった問題に新たな光が当てられ、よりよく理解されるようになることが多いのである。

印欧語比較文法においてヒッタイトがこれまでに果たした貢献の一部を挙げると、例えば、音韻論の分野では、Ferdinand de Saussure [1879] によって現実に在証される諸言語のデータから純粋理論的に要請された喉音 (laryngeal) の祖語における存在が、ヒッタイト語に部分的に反映されていることがポーランドの Kuryłowicz [1927] によって指摘された<sup>6)</sup>。これは、いわゆる「喉音学説(laryngeal theory)」の最初の体系的な提示であったが、以後今日に至るまで、この学説は印欧語の音韻論研究において中心的な役割を成し遂げてきた<sup>7)</sup>。また形態論においては、ヒッタイト語そして同じく今世

5) “Il faut prévoir aussi que la configuration d’une parenté peut toujours être modifiée à la suite de quelque découverte. L’exemple du hittite est, précisément, celui qui illustre au mieux les conditions théoriques du problème.” [Benveniste 1966 : 106]。(「それにまた親族関係の結構 configuration は、何らかの発見に伴っていつでも修正されることがありうることもあらかじめ見越しておく必要がある。ヒッタイト語の例は、この問題の理論的条件をまさにもっとも適切に例証するものである」 岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』)

6) Saussure 自身は、現在「喉音」と呼ばれている音を、coéfficients sonantiques と名付けている。ヒッタイト語で  $h$  で表記される音は、大抵の場合、印欧祖語に指定される三種の喉音 ( $h_1$ ,  $h_2$ ,  $h_3$ ) のうち、 $h_2$  である。

紀になって解読されたトカラ語の発見以前には全く個別的にしか扱われていなかった完了 (perfect), 中動態 (middle), そして thematic の能動態 (\*bhère/o- 「運ぶ」のタイプ) の語尾が単一の起源から由来するのではないかという説が, Kuryłowicz [1932], Stang [1932] を経て, Watkins [1969] によって発展した<sup>8)</sup>。統語論の面では, サンスクリットやギリシア, ラテンにおいて, 程度の差はあれ, 保持されている印欧祖語の SOV 的な語順の性格が, ヒッタイトでは特に顕著にあらわれている<sup>9)</sup>。印欧語比較神話の分野でも, リグ・ヴェーダ, ホーマー, そして古期英語のベオウルフなどに見られるのと並行する龍の退治のしかたが, Illuyanka というヒッタイトの神話に描かれている<sup>10)</sup>。

印欧学においてヒッタイトが占める重要な地位を, 上で極く大雑把に述べてみたが, ここ数十年の間に, 性質において従来とは本質的に異なる新しい波が, ヒッタイト研究に押し寄せている。次章では, ヒッタイトの歴史文法ばかりでなく, 印欧語比較文法に

7) 喉音学説のその後の発展は, Polomé [1965] によって明瞭かつ批判的に要約されている。喉音学説を理解するうえで重要なことは, たとえヒッタイトの *h* がなくとも, 祖語における喉音の存在を傍証する強力な根拠が分派諸言語に数多く見いだされることである。例えば, もし二音節語基 \**pe* または \**ple* 「満たす」の弱階梯が母音 *ə* を持つ \**ple* であるならば, 接辞 \*-*nó-* を伴った形として, サンスクリット \*\**prīná-*, リトアニア語 \*\**planas*, ゴート語 \*\**flans* が予期される。ところが, 実際に記録されている形は, サンスクリット *purná-*, リトアニア語 *pilnas*, ゴート語 *fulls* であり, これらは再構形として \**p̄lnós* を要請する。この事実は, \**p̄lnós* の前段階の形式の音節構造が *CIXC-* ではなくて, *CIXC-* と考えて初めて理解できるのである。つまり, *X* は母音 *ə* ではなくて, 子音間でソナント *l* よりも聞こえが低く, しかも先行する *l* を延張する性質を持った音, すなわち喉音 (laryngeal) である。

8) 中動態の語尾に関する諸問題については, Yoshida [1985] を参照されたい。

ヒッタイト形態論における最も困難な問題である *hi-* 動詞の起源に関して, Cowgill [1979] は, 従来認められている印欧語のいかなる範疇にも関係づけられないとし, インド・ヒッタイト説の枠組みで説明を試みている。しかしながら, より伝統的な線に沿っての解明の可能性がすべて尽くされたわけではない。そのひとつの試みが Jasanoff [1979] にある。

9) 印欧諸言語における統語構造の型については, Lehmann [1974], 松本 [1975], 吉田 [1981] などを見られたい。また, それぞれ VSO 及び SVO の基本語順を持つケルト語, ゲルマン語も, 古くは SOV 的性格が強かったことが, Watkins [1963], Yoshida [1982] において論じられている。

10) 詳しくは, Watkins [1985] が分析している。

対しても、全く新しい理解をもたらした、そして将来もたらし続けるであろう、革命的と言ってよいヒッタイト文献学における近年の目ざましい進歩について論じたい。

## II

1970年以前のヒッタイト研究において、方法論的にはほとんど無視されていたこと、それはヒッタイトにも約400年にわたる内部の歴史があるということである。ヒッタイト文法の音韻、形態、統語面のいかなる問題にせよ、包括的に記述するためには、記録された粘土板のさまざまな時期を考慮しなければならない。粘土板を古期、中期及び後期ヒッタイトに時代区分し、各共時相の分析を通じて得られた結果を通時的に考慮しない限り、どんな試みも正確な記述からは程遠いであろう。それでは、一体どのようにして粘土板が時代区分されるのであろうか。

1952年に、考古学的にみて古期ヒッタイトに属する地層から、歴史文書の断片 (*KBo VII 14*<sup>11)</sup>) が発見された。この意義深い発見によって、古期ヒッタイトの粘土板は *ductus* と呼ばれる一連の外的特徴を固有に持っていることが明らかになった。*ductus* とは、楔形文字の形、文字や単語間のスペース、コラムの幅、記録が書き始められる粘土板の上の位置などの物理的特徴の総称である<sup>12)</sup>。ツクラシ (*Zukraši*) 文書といわれるこの粘土板 (*KBo VII 14*) を基礎にして、同じ *ductus* によって特徴づけられる古期ヒッタイトの時代に書かれた他の粘土板が選び出された。このように、古期ヒッタイトの粘土板は、文法や正字法における特徴ではなく、究極的には独自の考古学的な根拠をもとに決定されるのである<sup>13)</sup>。

後期ヒッタイトの粘土板を同定する際に、歴史文書は極めて重要な役割を果たす。現存する粘土板がすべてオリジナルのテキストを含んでいるわけではない。同じ内容のテキストを含む粘土板が現実に数多く見いだせるのであるから、粘土板のかかなりの割合が後の時代のコピーであることは想像に難くない。極端な場合、古期ヒッタイトのテキストが、コピーの形で、徹底的に後期ヒッタイト風書き改められている場合さえあるか

11) *KBo* は刊行されている楔形文字テキストのシリーズ *Keilschrifttexte aus Boghazköi* の略。*KBo VII 14* とはこのシリーズの第7巻のNo. 14の粘土板を意味する。

12) 楔形文字の特徴の時代的差異については、Rüster [1972] と Neu und Rüster [1975] に詳しい。

13) ヒッタイト粘土板の時代区分における種々の問題に関しては、S. Heinhold-Krahmer, I. Hoffmann, A. Kammenhuber und G. Mauer [1979] を参照されたい。

もしれない。ところが、歴史的記録がその実際の出来事に先行することはあり得ないから、後期ヒッタイトの歴史文書は確実に後期ヒッタイトの ductus の特徴を反映していると言える。従って、後期ヒッタイトの粘土板の認定において、歴史文書は非常に安全な基準を与えてくれる。

中期ヒッタイトの粘土板の時代決定は、古期及び後期ヒッタイトの場合ほど容易ではなく、研究も進んでいない。最大の困難な点は、古期ヒッタイトの *KB<sub>0</sub> VII 14* に相当するような、考古学的に中期ヒッタイトと確実に認定できる粘土板が目下のところ存在しないことにある。従って、まず中期ヒッタイトの歴史的事実を描いている粘土板を調べるのが最善であろう（これは少なくとも、古期ヒッタイトの時期には書かれていない）。しかしながら、中期ヒッタイトのテキストが後期ヒッタイトの時期に写し直されたコピーとして存在することが十分予想されるから、中期ヒッタイトのオリジナルの粘土板を得るには、確実に後期ヒッタイトのオリジナルであるテキスト（即ち、歴史文書）から ductus において顕著に異なる中期ヒッタイトの歴史文書を捜さねばならない。そのよい例が *KUB XVII 21*<sup>14)</sup> の「アルヌワンダ王とアスムニカル女王の祈り」である。この粘土板の楔形文字の形は、後期ヒッタイトのものとは著しく相違しているばかりか、むしろ古期ヒッタイトの字形に近い。こうして、*KUB XVII 21* と同じ ductus を持つ粘土板を識別し、それらを中期ヒッタイトの時期に記録されたものと認定することができる。

粘土板の記録された時期が、専ら ductus を基準にして決定されるのに対して、粘土板に記されているテキストがどの時代に遡るかを定めるには、正字法（主に綴り字法）を含めた言語学的特徴が用いられる。古期ヒッタイトの ductus を持つ粘土板、及び中期、後期ヒッタイトの歴史文書の粘土板でそれぞれの ductus の特徴を示すものは、同時代の記録であることが保証されるので問題はない。ところが、他の粘土板の場合、同時代の記録であるか古い時代のテキストのコピーであるかは、ductus によっては判定できない。理論的には、性格においてそれぞれ異なる、少なくとも六種類の粘土板が区別される。

- (1) 古期ヒッタイトのオリジナル
- (2) 中期ヒッタイトのオリジナル
- (3) 後期ヒッタイトのオリジナル

14) *KUB* は *Keilschrifturkunden aus Boghazköi* の略。

- (4) 古期ヒッタイトテキストの中期ヒッタイトにおけるコピー
- (5) 古期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトにおけるコピー
- (6) 中期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトにおけるコピー

このうち、(1)は古期ヒッタイト、(2)、(4)は中期ヒッタイト、(3)、(5)、(6)は後期ヒッタイトの ductus の特徴を持っている。(2)~(6)をそれぞれ弁別するためには、まず(1)、それに中期ヒッタイトの ductus を示す中期ヒッタイトの歴史文書、及び後期ヒッタイトの ductus を示す後期ヒッタイトの歴史文書を個別に分析し、古期、中期、後期ヒッタイトに独自の文法的特徴をそれぞれ抽出しなければならない。次に、こうして得られた各時期の文法的特徴に基づいて、ductus によって分類された粘土板をさらに下位分類する。すなわち、中期ヒッタイトの ductus で古期ヒッタイトの文法的特徴を持つ粘土板は上述の(4)、中期ヒッタイトの文法的特徴を持つ粘土板は(2)と決定される。同様に、後期ヒッタイトの ductus で、古期ヒッタイト、もしくは中期ヒッタイトの文法的特徴を示すものは、各々(5)、(6)、後期ヒッタイトの文法的特徴を示す粘土板は(3)と見做すことができる。しかしながら、粘土板の性格を決定するプロセスは、必ずしもこのように理想的に進むわけではない。断片的な粘土板、及び明確な ductus や言語学的特徴を欠いている粘土板の場合、上の(1)~(6)のどのタイプに属するかを決める基準を提供しないことが多い。

古期、中期ヒッタイトの各時期の文法を記述する際、後の時代のコピーではない(1)、(2)のタイプの粘土板の重要性は言うまでもない。しかし、それらにのみ依存して、古期、中期ヒッタイトの文法を確立する試みは、過度に資料を限定する点で、適切でないかもしれない。古期、中期ヒッタイトのオリジナルの粘土板の数はかなり限られており、大半が後の時代のコピーとして存在する。もし、古期、中期ヒッタイトのオリジナルの粘土板には見られない言語学的特徴が、コピーにおいて発見された場合、それらをすべて後の時代の用法または筆記者の誤りに帰してしまうのは不当であろう。何故なら、古期、中期ヒッタイト語の言語学的特徴のいくらかは、限られた数のオリジナルの粘土板ではなく、後の時代のコピーにおいて、間接的に伝承されている可能性があるからである。この可能性を確かなものにするためには、まず問題となっている特徴が実際に後の時代のヒッタイトを代表するものかどうかを調べなければいけない。次に、もし調査結果がそうでないことを示すなら、それを古期または中期ヒッタイトの特徴と定めて、ヒッタイト内部の歴史的变化と極端に矛盾しないかどうか、さらには他の印欧諸語との関係が困難なく説明できるかどうかを確かめなければならない。以上の手続きを踏んで、

初めて該当する特徴が古期または中期ヒッタイトに帰属されるのである。

次に、古期ヒッタイトまたは中期ヒッタイトに代表的な言語学的特徴をいくつか示す<sup>15)</sup>。

A. 古期ヒッタイトの特徴（中期及び後期ヒッタイトには在証されない特徴）

1. *hi-* 動詞の1人称単数現在形の語尾 *-hē*（後のヒッタイトでは *-hi*）
2. 再帰を表わす小辞 *-uz*（後のヒッタイトでは *-za*）
3. 「前に」を意味する語 *pi-e-ra-an* のスペリング（通例は *pi-ra-an* と綴られる）
4. *mema-/memišk-* 「言う」と *menahḥanda* 「に対して」における第一音節の母音の綴りの上で重複（scriptio plena）*me-e*
5. 「そして」を意味する接続詞 *šu* と *ta*（後のヒッタイトでは *nu*）
6. 代名詞の単数位格形 *edi*, *kēdi*（後のヒッタイトでは *edani*, *kēdani*）
7. 「神」を意味する語の単数形 DINGIR-*uš*（後のヒッタイトでは DINGIR<sup>LIM</sup>-*iš*）

B. 中期ヒッタイト（及び古期ヒッタイト）の特徴（後期ヒッタイトには在証されない特徴）

1. 次の語に見られる scriptio plena. *ma-a-ah-ḥa-an* 「～する時」（後期ヒッタイトでは *ma-ah-ḥa-an*）。*ki-i-ša* 「～になる」（後期ヒッタイトでは *ki-ša*）。*sē-e-er* 「上に」（後期ヒッタイトでは *še-er*）。語幹 *a-ak-* 「死ぬ」。
2. *eš-* 「存在する」の三人称単数命令法 *e-eš-tu*（後期ヒッタイトでは *e-eš-du*）。
3. *a-ap-pa-(an)* 「後に」（後期ヒッタイトでは EGIR-*pa*/EGIR-*(pa)-an*）
4. *taršik(k)-* 「言う(反復相)」のスペリング（後期ヒッタイトでは *tarašk-*）
5. 代名詞の複数対格の後倚辞 *-uš*（後期ヒッタイトでは *-aš*）
6. 代名詞複数主格 *wēš* 「私たち」（後期ヒッタイトでは *anzāš*）
7. *-(ez)ziya-* を持つ形容詞（後期ヒッタイトでは *-ezzi-*）

これ以外に、中期、後期ヒッタイトには稀にしか在証されない特徴、及び後期ヒッタイトには稀にしか在証されない特徴がある。ここでは示さないが、これらも粘土板の性格を決定するうえで有効である。

このような基準に基づいて粘土板の時期を決定しようとする体系的な研究が、最近かなり現われている。代表的なものは、Kammenhuber [1969], Josephson [1972], Starke [1977], Oettinger [1979], とりわけ Melchert [1977] に含まれている<sup>16)</sup>。し

15) 以下の諸特徴については、Otten und Souček [1969], Otten [1969], Otten [1973], Neu [1974] などに論じられている。



かしながら、粘土板の性格の決定を目差す研究は今なお進行中であり、将来新しい事実の発見によって、現在のところ決定不可能な粘土板の性格が明らかになったり、従来とは違った解釈がもたらされたりすることが十分予想される。本格的なヒッタイト文献学はようやく始まったばかりなのである。

### III

ヒッタイト語の標準的な文法書、例えば Friedrich [1960] や Kronasser [1956] には、動詞の活用表や名詞の曲用表の特定の位置に二つ以上の異なった形式が与えられていることが頻繁にみられる。一例を挙げると、中動態過去の1人称単数語尾として、*-hahat(i)*と*-hat(i)*が与えられている。これだけでは、*-hahat(i)*と*-hat(i)*が全く恣意的に交替するという印象を持つ。ところが、最近のヒッタイト文献学の成果に立脚してデータを洗い直せば、語末に*-i*を持つ形式は古期ヒッタイト語では義務的であり、重複を伴う形式*-hahat(i)*は後期ヒッタイト語に限定されているということが分かる。つまり、従来は自由変異 (free variation) をなすと見做されていた形式が、実際には400年に及ぶヒッタイト内部の歴史的变化 (*i*-apocope と *-ha* の重複) を反映していることが、粘土板を厳密に時代区分することによって、明らかになるのである。この一例だけでも明確のように、伝統的なヒッタイト語の文法書の記述を全面的に信頼することは甚だ危険であると言えよう。

前章で述べた近年のヒッタイト文献学の目ざましい進歩を踏まえ、真の意味のヒッタイト歴史文法の構築を目差す体系的な研究が、ここ数年の間にいくつか現われている。その代表的なものは、Melchert [1977], Oettinger [1979], Gertz [1982], Kimball [1983], Melchert [1984], Yoshida [1986] である。これらの研究の対象は、音韻論、形態論、統語論と様々であるが、そこで用いられている方法論は基本的に同じである。つまり、粘土板を時代区分したうえで、各時代の共時的分析を試み、その結果を通時的に考察することによって、そこで扱われている各文法範疇のヒッタイト内部の歴史を説明しようとしている。Melchert [1977] は、奪格 (ablative) と具格 (instrumental) はいくつかの用法において自由に交替するように一見みえるが、実はそうではないことを示した。すなわち、少なくとも古期ヒッタイトでは、二つの格は機能的に互いに全く

---

16) これらの研究に含まれているテキストの番号は Laroche [1971] のカタログ及びその補遺 [LAROCHÉ 1972] に基づいている。

依存しておらず、後の時代になって奪格が徐々に具格の機能を兼ね備えるようになった。Oettinger [1979] は、ヒッタイト動詞の語幹形成法を記述的に分類し、各クラスに対して印欧語の観点から歴史的説明を施す意欲的な研究である。この研究は、Oettinger [1976] と合わせて読まれることが望ましいが、読者はそこでの議論の展開を極めて注意深く、批判的に検討しなければならないであろう。Gertz [1982] は、アナトリア諸語における中性複数形の主格—対格の形成法の歴史を、ヒッタイトを中心に調査したものである。いかなるタイプの中性複数形がテキストに在証されているかを時代別に調べたうえで、その本来の形成法と後に起こった音韻的及び類推的变化を提案した。Kimball [1983] は、Hart [1980] の観察を発展させたもので、古期ヒッタイトの粘土板において、scriptio plena は印欧祖語の長母音を伝承するのではなく、前ヒッタイト (pre-Hittite) におけるアクセントの位置を示すということを実証的に証明しようとした。この研究には、印欧語形態論の見地からみてアクセントが予想される位置に scriptio plena を含む例が数多く提示されている。例えば、*e-it-mi* 「私は食べる」(サンスクリット *ád-mi*) に対して、その分詞 *a-da-a-an* (サンスクリット *adánt-*)<sup>17)</sup>。Melchert [1984] は、二つの論文、“Reflexes of PIE \*w and \*y in Hittite” と “The Vowels *e* and *i* in Hittite” から成るヒッタイト史的音韻論研究である。前者は、印欧祖語の \*w と \*y がヒッタイトでどのように現出するかを、それぞれが指定される環境を考慮して分析しており、後者は、*e* と *i* がヒッタイトのいかなる時期においても、音韻的に別個な母音であることを主張している。Yoshida [1986] は、従来全く不規則に分布すると見做されていた、中動態現在に付与される要素 *-ri* がヒッタイト内部で独自の発展を遂げたことを示した。古期ヒッタイトでは *-ri* は *a*-クラス中動態の三人称単数にのみ顕著に見られるが<sup>18)</sup>、時代が下るにつれて特定の動詞 (e.g. *paršiya* 「こわす」) を除いて、徐々に一般化された。

上に挙げた諸研究のなかには、純粹にヒッタイト内部の言語史に対する貢献もあるが、多くは印欧語比較文法に極めて重要な影響を及ぼしている。例えば、Kimball [1983]

17) もちろん、ヒッタイトがその先史において印欧祖語のアクセントを移動したと考えられる例もある。例えば、*r/n*-語幹の集合名詞は holokinetic タイプの母音交替を示すが [SCHINDLER 1975]、ヒッタイトの *ú-i-da-a-ar* 「水(複数)」は接辞に scriptio plena を示している。これは、印欧祖語に再構成される形 \**wéd-or* (ギリシア語 *ῥῶγ* は弱格 (weak cases) \**ud-n'* の語根の零階梯を一般化している) が、前ヒッタイトの時期に接辞にアクセントを移したと考えられる。

に代表される *scriptio plena* の研究が一層進めば、サンスクリット、ギリシア語、バルト・スラヴ語に並んで、ヒッタイトが印欧祖語のアクセントを部分的に保存する言語として大きな役割を担うであろう。また、Yoshida [1986] は、Meillet [1903: 235] や Brugmann [1916: 657 ff.] の頃には Italo-Celtic の方言的特徴として非人称の性格を有すると見做されていた *-r* 語尾が印欧祖語の中動態現在を特徴づける要素であったことを、ヒッタイト内部のデータを整理することによって示している<sup>19)</sup>。

近年のヒッタイト研究を一層活性化するものは、Boğazköy 及びその周辺の地域での粘土板の新たな発掘及びそのテキストの出版である。現在までに発掘された粘土板の数は約 3 万に達しようとしている。また、ヒッタイトの実証的研究には不可欠である楔形文字テキストとして、*KBo*, *KUB*, *ABoT*, *IBoT*, *VBoT*, *HT*, *FHG* があるが<sup>20)</sup>、この

- 18) ヒッタイトの中動態は、*a*-クラスと *ta*-クラスに便宜上分類することができる。両者の関係は歴史的なもので、ヒッタイト以外のほとんどの印欧諸語で前者は後者にとって代わられた (cf. ヴェーダのサンスクリット *śaye* < \**kei-o-i* 「(彼は)横たわる」 に対して、古典サンスクリット *śete* < \**kei-to-i*)。 *a*-クラス中動態が *hi*-動詞、 *ta*-クラス中動態が *mi*-動詞から派生されるという Friedrich [1960: 77] の見方は支持できない。
- 19) *-r* 語尾はラテン語、古期アイルランド語、トカラ A, B にそのまま保持されている。インド・イラン、ギリシア、ゲルマン語派では、*-r* は能動態現在の deictic の *-i* に取って代わられた。アナトリア共通基語においては、語末の *-r* はアクセントの落ちる音節が直前に先行する場合を除いて脱落し [cf. EICHNER 1973: 98], 存続した *-r* に能動態の *-i* が付与された。
- 20) 各略号は以下の楔形文字テキストのシリーズを示す。

*KBo*= *Keilschrifttexte aus Boghazköi*. Berlin, 1916-.

*KUB*= *Keilschrifturkunden aus Boghazköi*. Berlin. 1921-.

*ABoT*= *Ankara arkeoloji müzesinde bulunan Boğazköy tabletleri*. Istanbul. 1948.

*IBoT*= *Istanbul arkeoloji müzelerinde bulunan Boğazköy tabletlerinden seçme metinler I-III*. Istanbul. 1944, 1947, 1954.

*VBoT*= *Verstreute Boghazköi-Texte*. Marburg. 1930.

*HT*= *Hittite Texts in the Cuneiform Character from Tablets in the British Museum*. London. 1920.

*FHG*= *Fragments hittites de Genève* in RA 45 (1951) and 46 (1952).

筆者の手元には、*KBo* は 27 巻まで、*KUB* は 53 巻までであるが、その後さらに数巻が新しく追加出版されたようである。

うち現在も継続して刊行されている *KBo* と *KUB* のシリーズの約 3 分の 1 が過去 15 年間に現われている。

新たな資料の著しい増加に加えて、辞書の編纂も進行中である。もはや廃刊となった Friedrich [1952] に代わるものとして、1975 年以来、故 Friedrich と Kammenhuber によって改訂版が刊行されつつある。またシカゴ大学においても Güterbock と Hoffner を中心にして 1980 年から記述的な辞書作りが推進されている。いずれも大部なものであり、その完結には相当の歳月を要するであろう。ヒッタイトの語源研究の成果は、Tischler [1977-] 及び Puhvel [1984-] に部分的にあらわれているが、語源辞書として完成するには、地道な努力がより一層積み重ねられなければならない。

このように、ヒッタイト研究者が今後しなければならない仕事は山積みされている。1982 年に東京で開かれた国際言語学者会議の全体会議の席上で、ハーヴァード大学の Watkins が述べていたように、ヒッタイト語の歴史文法は、近年のヒッタイト文献学の進展に基づいて、将来根本的に書き改められなければならない。ヒッタイトは、現在の印欧語研究のなかで最も楽しみな、そして最も多くの成果が期待される分野と言えよう<sup>21)</sup>。

## 参考文献

BENVENISTE, É. (岸本通夫監訳)

1966 *Problèmes de linguistique générale* I (『一般言語学の諸問題』), Paris.

BRUGMANN, K.

1916 *Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*, II 3/2, Strassburg.

COWGILL, W.

1975 More Evidence for Indo-Hittite: The Tense-Aspect System, *Proceedings of the Eleventh International Congress of Linguists*, L. Heilmann (ed.), Bologna.

21) 本稿では、ヒッタイト以外のアナトリア諸語 (Luvian, Palaic, Lycian, Lydian, Hieroglyphic Luvian) には全く触れなかった。これらの言語はいずれも断片的な記録しか持たず、多くの場合、アナトリア比較研究にまだ決定的な役割を果たしていない。文法書、そして辞書が出版されている言語もあるが、それらを取り扱う際、よほど慎重でなければならない。尚、Lycian に関しては、我が国にも優れた紹介がある [松本 1983, 1985]。

- 1979 Anatolian *hi*-Conjugation and Indo-European Perfect : Instalment II, *Hethitisch und Indogermanisch*, E. Neu und W. Meid (hrsg.), Innsbruck.
- 1981 Thematic Active Endings of Indo-Hittite, presented before the Cornell Linguistics Circle.
- EICHNER, H.  
1973 Die Etymologie von heth. *mehur*, *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 31.
- FRIEDRICH, J.  
1952 *Hethitisches Wörterbuch*, Heidelberg.  
1960 *Hethitisches Elementarbuch*, I, Heidelberg.
- FRIEDRICH, J. und A. KAMMENHUBER  
1975- *Hethitisches Wörterbuch*, Heidelberg.
- GERTZ, J. E.  
1982 *The Nominative-Accusative Neuter Plural in Anatolian*, Ph. D. dissertation, Yale University.
- GÜTERBOCK, H.G. and H.A. HOFFNER  
1980- *The Hittite Dictionary*, Chicago.
- HART, G. R.  
1980 Some Observations on Plene-Writing in Hittite, *BSOAS*, 43.
- HEINHOLD-KRAHMER, S., I. HOFFMANN, A. KAMMENHUBER und G. MAUER  
1979 *Probleme der Textdatierung in der Hethitologie*, Heidelberg.
- JASANOFF, J. H.  
1979 The Position of the *hi*-Conjugation, *Hethitisch und Indogermanisch*, E. Neu und W. Meid (hrsg.), Innsbruck.
- JOSEPHSON, F.  
1972 *The Function of the Sentence Particles in Old and Middle Hittite*, Uppsala.
- KAMMENHUBER, A.  
1969 Die Sprachstufen des Hethitischen, *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 83.
- KIMBALL, S. E.  
1983 *Hittite Plene Writing*, Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.
- KRONASSER, H.  
1956 *Vergleichende Laut- und Formenlehre des Hethitischen*, Heidelberg.
- KURYLOWICZ, J.  
1927 *ə* indo-européen et *h* hittite, *Symbolae grammaticae in honorem Ioannis Rozwadowski*,

Cracow.

- 1932 Les désinences moyennes de l'indo-européen et du hittite, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 33

LAROCHE, E.

- 1971 *Catalogue des Textes Hittites*, Paris.  
1972 *Catalogue des Textes Hittites : Premier supplément*, *Revue hittite et asianique*, 30.

LEHMANN, W. P.

- 1974 *Proto-Indo-European Syntax*, Austin.

松本克己

- 1975 印欧語における統語構造の変遷——比較・類型論的考察——, 『言語研究』, 68.  
1983 クサントスのレートーオン出土の三言語併用碑文とリュキア語研究の現状——特にその統語構造を中心に——, 『オリエント』, 26.  
1985 印欧アナトリア語派におけるリュキア語の位置——特にリュキア語の複数主格及び属格語尾をめぐって——, 『京都産業大学国際言語科学研究所所報』, 6.

MEILLET, A.

- 1903 *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris.

MELCHERT, H.C.

- 1977 *Ablative and Instrumental in Hittite*, Ph. D. dissertation, Harvard University.  
1984 *Studies in Hittite Historical Phonology*, Göttingen.

NEU, E.

- 1974 *Der Anitta-Text*, Wiesbaden.

NEU, E. und Ch. RÜSTER

- 1975 *Hethitische Keilschrift-Paläographie*, II, Wiesbaden.

OETTINGER, N.

- 1976 *Der indogermanische Stativ*, *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 34.  
1979 *Die Stammbildung des hethitischen Verbums*, Nürnberg.

OTTEN, H.

- 1969 *Sprachliche Stellung und Datierung des Madduwatta-Textes*, Wiesbaden.  
1973 *Eine althethitische Erzählung um die Stadt Zalpa*, Wiesbaden.

OTTEN, H. und V. SOUČEK

- 1969 *Ein althethitisches Ritual für das Königspaar*, Wiesbaden.

POLOMÉ, E.

- 1965 *The Laryngeal Theory So Far : a Critical Bibliographical Survey*, *Evidence for*

- Laryngeals*, W. Winter (ed.), The Hague.
- PUHVEL, J.  
1984- *Hittite Etymological Dictionary*, Berlin.
- RÜSTER, Ch.  
1972 *Hethitische Keilschrift-Paläographie*, Wiesbaden.
- SAUSSURE, F. de.  
1879 *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Leipzig.
- SCHINDLER, J.  
1975 L'apophonie des thèmes indo-européens en *-r/n*, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 70.
- STANG, Ch.  
1932 Perfektum und Medium, *Norsk tidsskrift for sprogvidenskap*, 6.
- STARKE, F.  
1977 *Die Funktionen der dimensionalen Kasus und Adverbien im Althethischen*, Wiesbaden.
- STURTEVANT, E. H.  
1942 *The Indo-Hittite Laryngeals*, Baltimore.  
1951 *A Comparative Grammar of the Hittite Language*, New Haven.  
1962 The Indo-Hittite Hypothesis, *Language*, 38.
- TISCHLER, J.  
1977- *Hethitisches Etymologisches Glossar*, Innsbruck.
- WATKINS, C.  
1963 Preliminaries to a Historical and Comparative Analysis of the Syntax of the Old Irish Verb, *Celtica*, 6.  
1969 *Indogermanische Grammatik*, III/1, *Geschichte der Indogermanischen Verbalflexion*, Heidelberg.  
1985 How to kill a dragon in Indo-European—further thoughts, presented at the Fourth East Coast Indo-European Conference (Cornell University)
- YOSHIDA, K. (吉田和彦)  
1981 印欧語の統語論研究に向けて, 『言語研究』, 80.  
1982 Towards Word Order and Word Order Change in the Older Germanic Languages, *The Journal of Indo-European Studies*, 10.  
1985 Problems in the Mediopassive Endings of Indo-European, 『言語研究』 88.  
1986 *The Hittite Mediopassive Endings in -ri*, Ph. D. dissertation, Cornell University.